

清末中国における日本の女子教育の情報：下田歌子の『新選家政学』（1900年）の中国語翻訳書に着目して

董, 秋艶
福岡県立大学人間社会学部（教育社会史・日中女子教育関係史）

<https://doi.org/10.15017/6769069>

出版情報：教育基礎学研究. 18, pp.37-51, 2021-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



清末中国における日本の女子教育の情報

～下田歌子の『新選家政学』（1900年）の中国語翻訳書に着目して～

董 秋 艶

はじめに

本研究の目的は、下田歌子（以下、下田）の著書『新選家政学』（1900年）がいかにして当時の中国人によって翻訳されたのかを明らかにすることである。1904年に清末政府が公布した近代教育制度『奏定学堂章程』においては、外国の女子教育教科書として下田の『家政学』が勧められた。表1（2頁の表①に参考）をみて分かるように、下田の『新選家政学』は1904年前からすでに四つの『〇〇家政学』と名をつけて翻訳されていた。清末政府が勧めている下田の『家政学』とは、恐らくこの『新選家政学』である。このように、下田の『新選家政学』がこの4つの中国語訳書により多くの中国人に知らされ、さらに学制に定める女子教育の教科書にも挙げられた。この意味からも、下田の『新選家政学』がいかにして中国に知れ渡ったのかを検討する意義を有する。

下田は実践女学校の設立者であり、最初に中国人女子留学生を受け入れた人物であった。故にこれまでは下田が中国の女子教育に与えた影響という立場から、下田と実践女学校に関心が払われてきた¹。近年は『新選家政学』の中国語版訳書に注目した研究がある²。黄湘金（以下、黄）は、主に銭単士釐が訳した『家政学』と曾紀芬が訳した『聶氏重編家政学』を取り上げて分析し、当時の中国社会における女性を啓蒙することの意義を論じた。韓韓（以下、韓）は、『新選家政学』に4つの中国語翻訳版があったことを指摘し、また、それぞれの中身の分析を通して、訳者たちは原作が述べていた家政と国家の関係とその重要性が共有されたと指摘した。本研究では、『新編家政学』と『家政学』と『聶氏重編家政学』3冊のそれぞれの翻訳経緯を分析し、その過程で交わった日中の女子教育に対する認識を明らかにすることを目的とする。

『新編家政学』は下田が中国人留学生と共同で創設した「作新社」より翻訳されたものであり、『家政学』の訳者銭単士釐（以下、単）は当時在日している中国人女性で下田の友人でもある。そこで、本研究は下田と中国人の交友活動に着目し、「作新社」が単の寄付金で軌道に乗っただけでなく、『新編家政学』が単を介して当時学制策定に選ばれた湖広総督張之洞に送られたこと、単の『家政学』がもたらした日中女性間の思想的な連鎖により『聶氏重編家政学』が翻訳され出版されたことを論じる。そうすることで、下田の名と著作が中国へと知れ渡った経緯を解明しうるとともに、当時の中国においては同じ中国人女性でも異なった女子教育の認識で『新選家政学』を受け入れ、啓蒙しようと

したことも明らかにできると考える。

表① 『新選家政学』 訳書の目次一覧表

巻	章	下田歌子著 『新選家政学』	銭単士釐訳 『家政学』	曾紀芬訳 『聶氏重編家政学』	作新社 『新編家政学』	湯 『新撰家政学』
		金港堂 明治33年	出版社不明 光緒28年5月	浙江官書局 光緒29年5月	作新社 光緒28年10月	廣智局 光緒28年11月
上 卷	一	総論	総論	一：総論	第一編：総論	
	二	家内衛生	家内衛生	二：教育初基	第二編：家人 之監督	
	三	家事経済	家事経済	三：教育漸次	第三編：一家 之風範	
	四	飲食	飲食	四：教育総義	第四編：衛生	
	五	衣服	衣服	五：家庭表率	第五編：一家 之財政	
	六	住居	住居	六：理財		
下 卷	一	小児教養	小児教養	七：養老		小児教養
	二	家庭教育	家庭教育	八：治病		家庭教育
	三	養老	養老	九：衛生		養老
	四	看病	看病	十：交際		看病
	五	交際	交際	十一：避難		交際
	六	避難	避難	十二：婢僕使役		避難
	七	婢僕使役	婢僕使役			婢僕使役

出典：筆者作成

第一章 下田と在日中国人銭単士釐との親交

1900年、下田は『教育時論』で、「清韓の教育程度は今日実に世界再劣等の地に在るを以て、此の際東洋婦人の義務として彼等を啓発誘導せざるべからず」³と唱えている。その翌年に自身が創設した実践女学校で中国人女子留学生の受け入れを始めた。当時来日している女性は、ほとんど政府の高官の妻かその娘であり、彼女たちとの親交も図ったようだ。実践女子大学図書館に所蔵されている書簡には、教え子の中国人女性だけでなく、前述した単銭単士釐（以下、単）への書簡も多く残されていた。単は外交官・銭恂（1853-1927）の妻である。銭恂は湖広総督・張之洞（以下、張）の幕下であり、張に在日中国人の留学生を監督する職務を命じられたため、1899年に一家を連れて来日したようである。第3章で詳しく述べるが、下田は単の息子の妻が実践女学校に留学したきっかけで単と知り合った。下田と単の親交ぶりは、単が下田に送った「丙午（1906年）秋留別下田歌子」という詩句からも窺える。

六載交情幾溯洄 一家幸福荷栽培 扶持世教垂名作 伝播徽音愧訳才
全国精神基女学 隣邦風氣頼君開 驪歌又唱陽関曲 海上三山首重回⁴

詩句には、下田を日本の女子教育者として高く評価し尊敬の意を表している。「六載交情幾溯洄 一家幸福荷栽培」とは、下田との六年間の交際と息子の妻を教育したことに感謝の意を表している。「扶持世教垂名作」とは、下田の著作『新選家政学』を指しており、「伝播徽音愧訳才」とは、自分が浅才ながらそれを翻訳して中国に伝播したと述べている。「全国精神基女学 隣邦風氣頼君開」とは、一国の精神は女子教育に基づくため、『新選家政学』の翻訳書を通して、中国にも女子教育を施す風気をもたらすことを期待したと述べている。

以上述べたように、下田は「東洋婦人の義務として」中国を「啓発誘導せざるべからず」という抱負を掲げ、在日中国人女性単との親交も図ったようである。次章は、下田がその交友関係を通じて行ったことについて論じる。

第二章 『新編家政学』が中国へ

前述した『新編家政学』が作新社から翻訳され出版された。この作新社は下田と留学生戔翼翬（1878-1908。以下、戔）と共同で設立したことがすでに指摘されている。本章では、作新社が設立された経緯の分析を通して、前述した単の寄付で軌道に乗ったこと、それによって『新編家政学』も出版されたことを述べる。また下田が単を通じて、その訳書を前述した湖広総督・張之洞に送ったことも述べる。

第一節 作新社の創設

作新社の設立は、おそらく下田が開いた中国語講習会（以下、講習会）から計画され始めたといえる。以下は、下田が聴講生の一人である邊見に勧めた言葉である。

支那へ行く気はないか。今は誰も支那を問題にしていないが、自分の考へを正直にいへば、日本の興亡といふものは、結局は対支問題を如何に処理してゆくかに在ると思ふ。日本と支那の有様をこの儘にして置くと、恐るべき結果に陥る。まづ具体的な第一着手としては、彼我新提携の前提として、お互いの人情、風俗、制度、文物をはっきりと認識しなければならぬ。その第一歩としては、まづ彼我の言葉が通じなければならぬ。支那の留学生はだいぶ来ているが、支那にゆく日本人の留学生は実に少ない。日本の為に、率先して支那に渡って見る気はないか⁵。

その会話をした翌日に、邊見は講習会に参加したという⁶。このように、下田は中国と「提携」するという考えのもとで中国講習会を開いたようである。また、1899年、中

国政府は「遴選生徒遊学日本事宜片」⁷を出し、その政策により地方政府から多くの留学生を送られ、1902年には500名にのぼったという⁸。下田はその情勢をいち早く洞察して、中国語講習会を開く運びとなったといえよう。

中国語講習会の教習が戢であり、戢は1896年に清国中央政府から選抜され、日本に派遣された最初の留学生の一人である。加納治五郎の亦楽書院を経て、1899年9月に東京専門学校（現在の早稲田大学）に入学した。1900年夏に孫文が漢口において蜂起した自立軍⁹に参加するため一時帰国したが、蜂起が失敗に終わり日本に戻った。同年の12月には、兼業として東京専門学校留学中の中国人仲間と「訳書彙編社」を作った¹⁰。このように、蜂起の失敗を経験した戢は、啓蒙活動に転じた。おそらく下田が1900年頃に戢と知り合い¹¹、中国語講習会もこの時期に始まったと思われる¹²。

また、1901年戢の帰国が作新社の設立のきっかけとなったようである。以下は1902年5月より訳書彙編社から発行された『東語正規』の前言の抜粋であり、前年度の1901年10月に書かれたものである。

辛丑（1901、筆者注）年の冬には卒業して帰国する予定である。新学に志す同胞に日本の文明を輸入しようと思っているため、すでに十数本の本を訳していた。ちょうど『東語正規』も売れ切りで再版の必要があり、現在は印刷を回しているところである。日本の本を中国で印刷するのがとても不便で、やむを得ず日本で印刷しなければならぬ。思うには、現在我が国は痛い目にあっただけで、有志者らが変法の策を求めようとしている。これから多くの留学生が日本にやって来るにちがない。しかし文明を輸入しようとするには、まず語学を学ばなければならぬ¹³。

おそらく戢の帰国と印刷の悩みが、下田の中国との提携の思いに具体的な計画を与えた。それが中国で日本書を翻訳・出版する作新社を作ることであった。邊見は「元代議士の肩書ある越後の素封家山田氏が、下田先生の情熱と、人格に感動して、対支事業の一助のもと、四万金を提供された。（略）機敏な宮地氏¹⁴と、戢先生が準備の為先発となって上海に乗り込んだ」¹⁵と当時の状況を回顧している。

作新社は1902年の10月頃から軌道に乗ったようである。1901年（明治34年）11月に翻訳された成瀬仁蔵の『女子教育論』の発行所は「作新訳書局」と記されており、住所は「上海大馬路泥城橋」である。翌年の10月頃に出版されたものの著者兼発行者が「作新社」となり、住所も「上海英租界大馬路福源里20号」となった。また、筆者が確認したところ、その後「作新社」より『世界近世史』（1902年）や『白山黒水録』（1903年）など多くの訳書が発行された。邊見もその年に上海の作新社に赴任したようである¹⁶。邊見が述べた通り、1901年から1902年にかけては準備期間であり、1902年の10月頃から軌道に乗った様子が窺える。

また、作新社が軌道に乗ったのは単からの一助もあったようだ。以下は下田から単宛に送付したお礼の書簡である。

回銭夫人

前回の手紙にお願いした訳書局への寄付の件、ご承諾いただき誠にありがとうございます。私の親族皆ともその厚意に感謝しております。今後ともご庇護いただけますよう、よろしくお願いいたします¹⁷。

このお礼の書簡には年月日が残されていないが、下田の手紙ではまだ「訳書局」と称している。また、第3章で述べる単の『家政学』が1902年5月に中国で出版されている。さらに、中国にある教育雑誌『教育世界』が1902年12月（第40期）から1903年1月（第42年）まで3回に渡って単が翻訳した永江正直の『女子教育論』を連載した。こうした事柄を考えると、単は1902年5月以降中国にいるように思われる。そう考えると、この手紙は「作新訳書局」から「作新社」になる前のものであり、単の寄付金が作新社を軌道にのせる一助となったといえよう。

下田は、作新社に自身の著作『新選家政学』の翻訳・出版を計画した。その序文を、清末政府が日本の学務視察のために派遣された在日中の呉汝綸に依頼したようである。以下は序文の抜粋である。

（略）下田は、今我が国では万事が革新の最中と聞き、女子教育が最も急務だと認識し、家政学という本を賛助しようとしている。（中略）すでに能文の士によって中国語に翻訳されているし、我が国に輸出しようとしている。その思いに感動せざるを得ない¹⁸。

序文の日付は「光緒28（1902年、筆者注）年秋7月」と記している。この時期、呉は日本視察の最中であり、下田と何回も面会していたことから¹⁹、下田が依頼したと思われる。翻訳版の書名は『新編家政学』となり、同年10月に出版された。

以上述べているように、戔の兼業活動と帰国は、下田の日中提携の思いに具体的な事業計画を与え、それが作新社を設立することであった。そして、その作新社は友人である中国人女性単の寄付金で軌道に乗ることができた。『新編家政学』もこの作新社によって中国に渡ったのである。

第二節 湖広総督・張之洞への贈書

実践女子大学図書館に所蔵された単への書簡の中に、興味深い一通があった。下田は「令娘（錢豊保）がとても元気で、勉強も励んでいるから、最近頗る成長を見せてくれた

ので、とても喜ばしいことである。貴国に一旅することは私の最も希望することである。(略)しかし私の素志から言わせば、北京には必ずいきたい²⁰と述べた上で、「張氏夫婦には一書を別呈しているから、伝達いただけると幸い」²¹と記している。この書簡も年月日が不明だが、銭豊保は1902年9月から実践女学校に入学し、1904年の7月には卒業した。また、別呈している張氏夫婦への書簡には「私が1ヵ月あまりの夏休みがある。貴国に行く予定」と述べているから、1903年の夏休み前に送ったものと推測できる。「張氏夫婦には一書を別呈している」という「張氏」とは、湖広総督・張之洞(1837-1909。以下、張)のことである。前述したように、単の夫は張の命を受けて日本に赴任してきた。また、ちょうど張が1903年5月より中国の学制策定にメンバーとして加えられている。おそらくその情報を下田が単からキャッチし、直ちに単を通じて張に書簡を送ろうとしたのであろう。

張宛ての書簡には「近来銭氏の娘が敝塾に来て、そのきっかけで銭夫人(単のこと)と知り合った。(略)銭氏に託して一書を謹呈しております」²²と述べた上で、以下のよう書いた。

督台の名は敝邦にも伝えられている。督台は国家の進歩を目指し、多くの弟子を敝邦に留学させている。しかも学政を規画し法も整えているから、教育の風気が益々高まるだろう。喜ばしいことだ。また、最近貴国の女生徒が敝邦及びヨーロッパ諸国に留学することも増えつつあると聞いたので、それはより一層喜ばしいことである。ただ、その際に要心しなければ、若者たちが他邦の華麗なところに誘惑され、本邦の實を忘れてしまう。まさに本末転倒である²³。

このように、張の留学政策を高く評価した。しかし中国の女子留学生の増加には「要心しなければ本国の實を忘れる本末転倒」の結果になる恐れがあることを勧告した。そして、その「本末転倒」を防ぐために、女子教育を施すには、元々中国に要している「東洋女徳の美」を教えるべきもので、その上に科学の知識を加えることを訴えた。

東洋女徳の美は世界の冠に位置付けられるものであり、古今の史籍にも伝えられている。しかし、新しい風が吹きはじめ、その中に誤りを犯して本末転倒する人も必ずいる。私が思うに、今日の女子教育を行うには、主に東洋女徳の美を教え、それに科学の知識を加える。東西を混合し、互いに長短を取捨して得失を補えれば、文質彬彬となり、必ずいい結果に至ると思う²⁴。

また、書簡を通じて張に「教育に携わるものとして徳望があり勢力もある人が最も宜しい。まず家塾を開き、その風気を興す。次に女教師を雇い、女学を開き、それが将来

の高等女学の基礎となり、今日の急務でもある」と勧めた上で、「貴国の富強と開明はアジア全局の隆盛にかかわる。私は不肖ながらも、全力で教育に従事し、国家の女学の振興に身を捧げることを決心しておる。(中略) 私が1ヵ月あまりの夏休みがある。貴国に行く予定にしており、閣下にお会いしたとき、私の素志を伝え、賢教を請うことを切に願う」²⁵との心中を明かした。

張氏夫婦への書簡には以下のような「再白」もあった。

拙著家政学は既に能文の士によって翻訳してもらった。それは貴友に送るためであった。「己を知る」の感が實に叩謝されるべきことである。しかし拙稿がなければ知る事ができず、得でも赧然するだろう²⁶。

このように、下田は書簡を通して張に女子教育の意義を訴えるだけでなく、説得させるため、作新社から出版された『新編家政学』を張に謹呈する目的もあった。

前述したように、下田は中国の教育を「啓発誘導」する抱負を掲げている。そのため、下田は張が中国の学制策定に選ばれた直後に、彼に女子教育の意義を訴え、その『新編家政学』を謹呈することで説得力を増そうとした。下田の中国行きは実現できなかったが、「はじめに」にも述べたように、1904年に公布された『奏定学堂章程』において、下田の『家政学』が外国の女子教育の教科書として勧められたのである。

第三章 『家政学』から『聶氏重編家政学』へ

第二章では、下田が積極的に自身の名及び著書『新選家政学』を中国に勧めたことを述べたが、第三章は、前述した中国人女性の単が自ら下田の『新選家政学』を翻訳し、その訳書がさらに中国人女性の曾紀芬によって再編されたことを論じる。

第一節 錢単士釐の『家政学』

前述した張宛の書簡にも分かるように、単との親交は、単の息子の妻の錢豊保（以下、錢）が実践女学校に入学したことがきっかけであった。しかしなぜ単が『新選家政学』を翻訳することに至ったのか。その答えを探るため、まず単がどういう人物であるかを分析する。

錢は実践女学校に入学する前にすでに愛住女学校に入学していたようである。この出来事が日本の女学雑誌にいち早く取り上げられている。

支那青年の本邦留学は最早珍らしからぬ事なれども、女子の留学は之を嚆矢とすべし。彼の張之洞の幕下にして、留学生の監督たる錢恂氏は、其子息をば辮髪を断ちて慶應義塾に入らしめしが、今茲十八なる令嬢某をば、四谷愛住女学校主小貝貞

子に託して寄宿勉学せしむることにゑ、貞子は身に引受けて熱心に教育する由²⁷。

つまり、銭は中国の女子日本留学の第一号であった。女性としては当時珍しいことであった留学をさせたのが、単夫婦であった。このことから、単は当時としては新しい考えの持ち主であったといえる。

1901年6月、実践女学校に入学する予定の中国人女子留学生の来日が多く女性の雑誌に取り上げられた²⁸。9月の雑誌に掲載された実践女学校の入学者名簿に銭の名があった²⁹。銭は実践女学校が中国人女子留学生を受け始めたことで転学したようである³⁰。単は娘が転校した翌年の5月に『家政学』を出版したのである。単が翻訳した理由を知るための手掛かりとして、さらに単が著作した旅行記『癸卯旅行記』³¹を取り上げて分析する。

大阪博覧会の教育館を参観した際、単は以下のように述べた。

日本が今日世界に立ち、滅亡を免れ列強へのし上がったのは、ただ教育によるものである。(中略)教育の要諦は、すなわち国民を養成することであり、政府の役人になるための人材育成ではない。故に男女ともこれを普及するのが重要である。しかも子どもの教育は母教から始まっている。従って、教育の根本を論じれば、女子の方が男子より何倍も重要である。(中略)今日の中国でも、教育の必要を論じはじめているが、国民養成の視点からではなく、ほとんどが人材育成の立場から論じられている。それゆえ女子教育を論じるものは極めて少ない。(中略)しかし国民がいなければ、人材が得られるだろうか。国民がいなければ、一つの社会も成り立たない。中国の前途は一番鶏がまだ夜明けを告げておらず、日本の教育館を参観すると感慨に堪えない³²。

このように、単は日本が「国民養成」の教育を通じて世界の強国となったことを認識し、「人材育成」の立場から論じているばかりの中国の風潮を批判した。つまり、単は国民養成と社会形成との緊密性を痛感しており、女子教育の普及を唱道したのである。

また、日本女性が国民として生じた「愛国心」にも感激したようで、「中国婦女は、一室に閉ざされ、国があることを知らない。私は日本から来て、彼(日本)の婦女は国民であることを自任し、しかも国を強くさせられるのは我々婦女の方だと思っている。これを聞いて学び、私もまだ思わず愛国心を発せずにはいられない」³³との感想を述べた。

単が聞いた日本婦女がいう「国を強くさせられるのは我々婦女の方だ」という記述は、『新選家政学』の「総論」に見受けられる。以下はその抜粋である。

世界の徳義風俗の、清く正しく成りもて行きて、国民の気象、直く敦く成りなん

ことは、単へに、婦人其の力によれること多しと知るべし³⁴。

また前述したように、下田は「東洋女徳の美」を称賛している。単は東洋の中でも特に「中国の婦徳」を高く評価し、それを中国の女子に学ばせることの必要性を述べた。

(略) 中国の婦女はもともと外出することが少なく、まして大雨を冒して人の多い公の場を歩くなどはなおさらである。私は息子の妻に「今日の外出は専ら知識を広げるため、雨の中に身を擲っても礼儀に背くものではない、況して夫の両親のお供をして行くのだから。しかし、東京に帰ってからは、校則を守って軽々しく外出すべきではない。私は婦徳を論じれば、中国の方が勝っていると思うが、学ぶことがないのを恨むだけだ。日本人は婦徳を守り、またさらに学んでもいるのも、尊ぶべきことだ。あなたのお義父さんの話を聞くと、西洋の婦女も徳操がある。しかし、その徳操を犯する人が多い。交際の場で議論したり、琴・書・歌・ダンスも披露したり、確かに優美に見えるが、中身はそうではないようである。それならば手本にすべきものではない。今日西洋を称賛し、東洋を貶する者が多く、婦徳を論じる者にもそのような傾向が見受けられる。あなたにはそれらの言論に惑わされないよう願う³⁵。

この考えは、旅行途中に一時帰省した単が弟の友人と一緒に日本の女子教育を議論したことからも窺える。

伯寛の友、顧と金の二氏が私に日本の女子教育のことを聞きたいので会ってほしいとのこと、旧習から言えば、婦女は親族でなければ顔を合わせない。ただ私は年を取っており、しかもよく外国人の賓客と会っているので、今我が国の青年が、私に少し知見があると思い、私に女子教育について意見を聞きたいとのことだから、誠心誠意知らせなければならぬと思った。その故伯寛と同伴して彼らと会った。女学の宜を話すために女徳の話から始めた。女徳とは、そもそも見えないものでも、分からないものというわけでもない。日本の女学校の教え方を例に挙げていささか話した。中国の女学はすでになくなってしまったとはいえ、女徳はまだ人々の性質の中に伝わっており、もしも教育に優れ、その智を導くことにてその徳を完全なものとしてできれば、地球上で無二の女性教育国となるだろう。女性教育からさらに子孫に及ぼせば、すなわち地球上で無二の強国となるだろう³⁶。

このように、単も下田と同様に、中国の婦女は日本のように科学知識を学び、中国固有の婦徳を学ばせれば国が強くなるとの考えを示した。

以上述べたように、単は日本で見聞きしたことを通して「国民養成」の視点から女子教育普及の必要性を認識した。また、下田との親交及び彼女の著作『新選家政学』を読んだことで、女子に科学的な知識のみならず、女徳を加える教育を施すならば国も強くなると認識した。ゆえに前述した単の詩句にも述べたように、中国にも女子教育を施す風気をもたらすように、下田の『新選家政学』を翻訳・出版した『家政学』を通して、中国の民衆に啓蒙しようと図ったのである³⁷。

第二節 曾紀芬の『聶氏重編家政学』

曾紀芬³⁸（1852-1942。以下、曾）の言葉を借りれば「5月に、日本の下田歌子著『家政学』を読み歓喜した。中国の民衆にも紹介したい。ただその内容は我が国の国情に合わないところがあるので、その損益を斟酌し、息子の其昌、其傑及び姪の夫の劉寿霖に写し取ることを命じて、安慶抗署において印刷した」³⁹という。このように、曾は下田の著作を読んで大喜びし、その本を中国の民衆にも読んでもらいたいため翻訳することにしたようである。では、なぜ曾はこの本を読んで歓喜し、中国の民衆にも紹介しなかったのか。

下田の『新選家政学』の総論には、下記の記述がある。

抑も、男の外を理め、女の内を整ふるは、実に天賦の職責にて、能く其性情体質に適合せるものといふべし。故に、女子は、専ら家事内政に與りて、常に、細密周到なる注意を以てし、其外に出で、大事に当り、心を碎き、力を竭す、男子の業を陰に助けて、毫も内顧の虞なから志むるこそ、其本分を盡せりとはいふなれ。されば、女子が、家事を整へたる功績は、男子が國務の上に顯したる名誉に、聊も変わる事無し⁴⁰。

下田は「男の外を理め、女の内を整ふる」ことが「天賦の職責」であり、女子の内政の功績は男が国を支えることの功績と同じであると述べた。そして、「家事内政」の中身を下田は次のように述べた。主婦は「一家の主宰たり。故に、主婦、先ず、其家法を厳かに守りて、さて後に、能く、命令、其下に行はるゝことを得べし」⁴¹。また「家族の監督を忽せにすべからず。即ち、老人、幼者の取扱い、婢僕の使役、且、その保護、教養、指揮、命令に至るまで、十分に行き届きて、各自、能く其位置と職務とに安んじ、百事、いさゝかも渋滞することなく、能く整ひ、能く行はるゝやうにぞあるべき⁴²」と述べた。

曾は、『聶氏重編家政学』において、父である曾国藩の家訓を載せながら、叙言に「幼い頃から家訓を受けられている。(中略)聶家にきてから30余年あまりあり、舅姑に仕え、夫を助け、子を育て、相嫁同士と付き合い、そして息子の嫁、妾と婢僕との間にわ

ずかのわだかまりや齟齬もない⁴³」と述べていた。家訓には「我が家の男子が「看・読・書・作」という四つのことに従事し、一つも欠けてはいけない。婦女が「衣・食・粗・細」という四つのことに従事し、一つ欠けてもいけない」と書かれている。以下は曾家婦女の日課である。

朝食後	料理、点心類など	食事
午前	女紅 紡績	衣事
午後	針 刺繍類など	細工
夜	靴や服をつくる	粗工 ⁴⁴

つまり、曾は自分が受けた家訓と生き方は、まさに下田が述べている「専ら家事内政に與りて」いるとのことであり、その功績が「男子が国務の上に顯したる名誉に、聊も変わる事無し」と下田が述べているから、「己」を知る友を得られたように歓喜し、中国の民衆にも紹介したいと考えたのであろう。

また、曾は「家庭の振興」と「教育」の関係性も認識しているようである。

最近、国の隆盛が家庭による、家庭の振興が教育によるという論がある。余は身をもって区々に敢えて受け入れようとはしないけれども、それが必然の帰結と信じる⁴⁵。

それが故に、曾は総論に「億萬の主婦が、身をもって教育を興せば、一家より全国に広がって行き、文明も想像できない速さで進化するだろう」と期待し、下田が述べた「教育大意及び主婦の責任」を、「必ず我が国の習俗と調和して理解できるように翻訳しなければならぬ」との意気込みを述べた⁴⁶。表①を見ても分かるように、原作の下巻第一章と第二章の「小児教養」と「家庭教育」を、曾は「教育初基」、「教育漸次」、「教育総義」と第二章から第四章に渡って翻訳し、掲載した。

しかし、曾は下田の本を翻訳し、それをもって中国の婦女を啓蒙するだけではなかった。曾は下田が述べた女子の「家事内政」を、当時の中国の「国の綱常」にもなるよう期待したようである。

下田の家政学は緒論が深く、条目が縝密である。家庭の義務を主婦の責任に帰すると述べた。それを婦女に啓蒙し、国の綱常を整えればよい⁴⁷。

「家庭の義務を主婦の責任に帰する」とは、下田が述べた「女子は専ら家事内政」することである。曾はその「主婦の責任」を中国の婦女に分ち合うように、さらに礼経・

易経にある教訓をもって解釈した。

中国は女子に才なければ徳ということをも以て躰てきた。我が家も代々その奉行を守ってきた。女性は文・芸・詞・章を堪能できなくとも、礼経がいう徳・言・容・功を一つも欠落させてはいけない。易経の「女正位乎内」とは、齊家の撃が内政であると明言されている。私は家道の振興は実に婦の道の如何に左右されるとの事を世に伝えたい⁴⁸。

このように、曾は下田が述べた主婦の責務を、礼経における「婦の四徳」と易経にある「内政」から「正当性」を主張した。こうした「婦の道」を「国の綱常」すなわち国家の守るべき道として整えることを期待したのであろう。

ところが、曾はこの年では既に50歳となり、日本語の『家政学』を読んだとは思えない。おそらく、単の訳文を読んだと推測される。なぜならば、「5月に、日本の下田歌子著『家政学』を読み歓喜した」との記述がある。曾の『聶氏重編家政学』が1903年の5月に出版されたから、前年度の5月になると思われる。表①で分かるように、他の訳書のうち5月に出版されたのは単の訳本のみである。また、曾は「原作が家政学だったので、それを区別するように「重編」2文字を加えた」⁴⁹と述べている。他の訳書の中で、単の訳書だけが書名『家政学』となっていることから、単の訳本を読んでいたといえよう。

おわりに

下田は、中国における近代女子教育の普及を「啓発誘導」することが、日本婦人の義務とした。そのために、自身が創設した実践女学校に中国人女性の留学を受け入れ始めることに止まることなく、来日した中国人との交際を広めた。そうした交友関係を通じて、下田は「啓発誘導」できる訳書局である作新社の創設を企画し、『新選家政学』が本社により翻訳され出版されたのである。また、創設当時下田は訳書局を軌道に乗せられるように、経費の寄付について日本で知り合った中国人女性である単に協力を求めた。単の夫が当時の湖広総督張の幕下であり、張が学制の策定に選ばれた情報を掴んだ後は、さらに単を介して書簡で張に「東西の長短」を取捨した女子教育の普及を勧め、その説得力を増すために、作新社が訳した『新編家政学』を張に謹呈した。それが、1904年に公布された『奏定学堂章程』において、外国の女子教育の教科書として勧められることとなった。

一方、単は、日本で見聞きしたことを通して、日本が強国になったのは「国民養成」教育による成果だと認識し、下田がいう国民である女の力「科学知識も学び、東洋の女徳も学ぶ」という女子教育論に共感した。故に「一番鶏」となって下田の『新選家政学』

を翻訳し、その訳書を通して、中国にも女子教育を施す風気をもたらすことを期待したのである。単の訳書を読んだ中国人女性の曾は、自身の生き方より下田の「主婦の内を整える天賦の職責が国家の文明」につながるという論述に共感した。それがゆえに、曾は中国の女子も「専ら家事内政」をするように、中国の史籍にある「四徳」と「内政」から解釈し、これが「国の綱常」すなわち国家の守るべき大道となるよう、『新選家政学』を翻訳して中国の婦女に啓蒙しようとしたのである。

このように、『新編家政学』が下田の働きかけにより翻訳され清末中国に知れ渡ったのである。そして、『家政学』が翻訳されたのは下田の中国人女性との交友関係がきっかけであった。その『家政学』の出版が単の期待通り『聶氏重編家政学』の出版をもたらした。また表①の目次を見ると、恐らく廣智局の『新撰家政学』も単の『家政学』を読んで下巻だけ「新選」したと推測する。それらが当時の中国に多くの翻訳版が存在したということと繋がり、学制上では外国の女子教育の教科書として勧められることとなった。

〔注〕

1. 小野和子「下田歌子と服部宇之吉」（竹内好・橋川文三編『近代日本と中国』上 朝日選書13 朝日新聞社 1974年）、上沼一郎「下田歌子と中国人留学生：実践女学校「中国留学生部」を中心として」（『実践女子大学文学部紀要』第25号 1983年）、崔淑芬『中国女子教育史 — 古代から一九四八年まで —』（中国書店 2007年）、陳姪媛『東アジアの良妻賢母論 — 作られた伝統』（勁草書房 2006年）、など。
2. 黄湘金「从“江湖之遠到廟堂之高 — 下田歌子《家政学》在中国」（『山西師大學報』社会科学版 2007年）、韓韓「清末における下田歌子著『新選家政学』の翻訳・出版について」（『言葉と文化』第15号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻 2014年）。
3. 下田歌子「清韓女子の教育」『教育時論』556 明治33年9月25日
4. 「丙午秋留別下田歌子」単士釐著・陳鴻祥点校『愛茲室詩稿』湖南人民出版社 1986年
5. 故下田校長先生傳記編纂所『下田歌子傳』非売品 昭和18年 425頁
6. 同上 427頁
7. 「遴選生徒遊学日本事宜片」1899（『約章成案匯覽』（1905）乙編 卷32下、北洋洋務局）。
8. 山室信一『思想課題としてのアジア — 基軸・連鎖・投企 —』岩波書店 2002年 320頁
9. 1899年孫文と唐才常らが自立軍を組織した。日本に亡命していた康有為らの援助を受け、留学生では戦をはじめ、国民報の創立者秦力山、沈翔雲らが参加した。康有為が約束した援助金が届かず、失敗に終わった。
10. 振環「戡元丞及其創班的作新社与《大陸報》」（『安徽大學學報』第6期 2012年）、吳相湘主編『中国史学叢書』49 台湾学生書局 1966年）、前掲山室信一『思想課題としてのアジア — 基軸・連鎖・投企 —』など。
11. 邊見勇彦『満州義軍奮闘記：自伝』先進社 1931年 34-35頁（また、孫文は蜂起のため帰国する前に下田と会っている。その時期に戦も孫文と会っていることから、孫文の紹介により知り合った可能性がある）
12. 邊見によれば、1900年、義兄である時任一彦がドイツ留学に命じられたことにより上京した。自分もほぼその頃に上京したという（前掲『下田歌子傳』）。

13. 戢翼翬、唐宝鏐『東語正規』訳書彙編社 1902年5月
14. 講習会メンバーの一人である（前掲『下田歌子傳』）。
15. 同上
16. 同上
17. 実践女子大学図書館所蔵「清国知友宛書簡」
18. 『新編家政学』作新社 光緒28年 1頁
19. 董秋艶「日清戦争後中国女子教育普及に向けた日本教育界の働きかけ — 呉汝綸の日本視察（1902）をめぐって」九州大学大学院教育学コース院生論文集『飛梅論集』 2013年
20. 前掲「清国知友宛書簡」
21. 同上
22. 同上
23. 同上（張は1898年に『勸学篇』を著作し、その中で日本への留学を勧めている。実際にも張は日本に留学生を派遣しており、単の夫をその留学生らの監督に命じた。
24. 同上
25. 同上
26. 同上
27. 「支那女子の本邦留学」（『女子之友』明治34年10月18日 雑報）、「支那女子の留学」（『大日本婦人教育会雑誌』明治34年10月15日 彙報）。
28. 「女子留学生の来朝」（『令徳』明治35年6月22日 雑報）、「女子留学生の来朝」（『愛国婦人』明治35年6月25日 学事彙報）、「清国女学生の来朝」（『婦人雑誌』明治35年7月3日 雑報）、「清国女子留学生の来朝」（『大日本婦人教育会雑誌』明治35年7月29日 彙報）、「清国女学生」（『女鑑』明治35年7月5日 雑報）、「新来の支那女学生」（『少女界』明治35年8月11日 口絵）。
29. 「留学の支那女学生」（『愛国婦人』明治35年9月25日 雑報）、「留学の支那女学生」（『大日本婦人教育会雑誌』明治35年10月15日 彙報）。
30. 羽仁もと子「支那の女生徒」『少女界』明治35年8月11日 雑録
31. 『癸卯旅行記』とは、単が1903年陰暦2月17日から4月30日までの間に、東京（大阪・京都・神戸・長崎）→中国→朝鮮→ロシアへと旅した際、各地で見聞したこと、特に日本での生活を通して得られた思いを多く綴っている一冊の旅行記である。翌年に刊行された。大阪博覧会までは銭を連れていたようである。
32. 同上『癸卯旅行記』3～5頁
33. 同上 77頁
34. 下田歌子『新選家政学』金港堂 明治33年 5頁
35. 前掲『癸卯旅行記』13～14頁
36. 同上 21～22頁
37. 劉志琴編『近代中国社会文化変遷録』浙江人民出版社 1998年（その訳書を、1902年8月6日の『中外日報』は「新訳日本女学士著家政学」という題目で、「女子が本を翻訳するのは、これまでの中国になかったことだ」と称賛したという。単はその後、永江正直の『女子教育論』を翻訳し、教育雑誌『教育世界』が1902年12月（第40期から1903年1月（第42期）まで3回分けて掲載した。（東京都立図書館「実藤文庫」所蔵「教育世界社「教育叢書」」）。
38. 曾国藩の末娘であり、号が崇徳老人と称す。24歳の時に聶緝槃（1855-1911）と結婚した。
39. 「崇徳老人自訂年譜」（曾宝蓀『曾宝蓀回記録』岳麓書社 1986年）に収録されている。42～43頁）
40. 前掲 下田歌子『新選家政学』
41. 同上
42. 同上

43. 曾紀芬『聶氏重編家政学』1903年
44. 同上
45. 同上
46. 同上
47. 同上
48. 同上
49. 同上